追悼： 奥山典生　先生

1）
協会ジャーナル毎号お送り頂き有難うございます。

奥山典生先生が亡くなられました由、謹んでお悔やみ申し上げます。

私は奥山典生先生と大阪大学理学部化学科昭和２７年卒業の同級生ですが、亡くなられたことは初めて知りました。

１０月７日大阪で同期会がありますので、そのとき奥山先生を偲びたく存じます。

奥山先生から協会ジャーナルをお送り戴き、私も時々出席し、皆様のお話しを伺っていました。奥山先生は旧制大阪高等学校の出身で、大高出身の方が同期に大勢いました。その当時、恩師の赤堀教授は後に東大理学部に移られ、同期で大学に残られた方の中には、東大理学部生物化学の教授になった、岡田吉美、大阪大学理学部化学の教授の花房照静がいました。１０月７日の同期会には、花房も出席します。

大島輝夫

2）
私と奥山先生

私が奥山先生と初めてお会いしたのは 1996年頃だったと思う。

「バイオ分野の分析技術と機器 ―最近の動向についての調査」という通産省のプロジェクトを私の研究室で学位をとられた千田正昭さん（当時分析機器工業会に日本分光から出向していた）が取って来たとき、私もお手伝いすることになった。そのとき委員長を引き受けて下さったのが奥山典生先生である。クロマトグラフィー関係では有名な技術者である千田さんがその関係で永年先生とお付き合いがあった関係である。私は名前だけの副委員長として報告書をまとめただけで全て奥山先生と千田さんがプロジェクトを進めた。この通産省プロジェクトは
1997年には報告としてまとめ（ぶんせき 12: 1029-1030 (1997)）、委員会は解散した。

実は奥山先生のお名前は 1960年代私がまだ大学院の学生だった頃から存じ上げてはいた。

連絡先

住所：
〒 173-0005
東京都板橋区仲宿 44-2

blog:
sabsnpo.org/blog

email:
office@sabsnpo.org

日本生化学会や酵素化学シンポジウムなど私が当時必ず出ていた学会でいつも目にしていたお名前だったからである。私も先生と同じ生化学分野に身を置いていたわけだが、なにしろ生化学会は当時から巨大な学会でいろいろな分野があり、乳酸菌の酵素しかやってなかった私が先生とご一緒することはなかったんだと思う。だから、先生のお名前はしょっちゅう拝見してはいたが、お顔を知る機会はなかったのである。

実際お会いしてお話をしているうちお互い別々に知っている昔の研究者たちの名前から始まり、クロマトやら電気泳動やら「生化学分野の分析」という共通のフィールドがあることも分ってきた。

このプロジェクトのお陰で私はそれ以来年３回ある工業会の懇親会に招んで頂いているのだが、そこで必ずお会いするのが奥山先生だった。だから１９９７年以来毎年３回は先生にお会いしていたことになる。いつだったかその会で先生から「今、生化学の標準化に取り組んでいる」という話を伺った。私は、生化学や分子生物学のような日進月歩の分野での標準化は難しいだろうなどと生意気なことを申し上げたのを覚えている。

その後毎度お会いするたびにその話をされる。そのたびに先生の博識に感心するものの余り真面目に考えなかった。2004年に私も 25年勤めた埼玉大学を定年退官し少し暇ができたころ、先生からジャーナルを転送頂き初めてこのバイオテクノロジー標準化支援協会（以下 SABS
と略す）の会合に出た。そのときの No.011のジャーナルが私の手元にある。あの分かりにくい八雲クラブによく独りでたどり着けたと思うが多分千田さんが連れていってくれたのではないかと思う。それ以来かなり真面目にほとんど毎回出ていたせいか翌年の秋には理事にして頂いてしまった。「名前だけで何もしなくていい」とおっしゃっていたと勝手に思って本当に何もしなかった。実は何かお手伝いしたいとは思っていたのだが、あの非常に広い人脈、豊富な経験と学識をお持ちの奥山先生のお手伝いは何ができるだろうか、どうしたらいいのか等と考えているうち月日が経ってしまった。

今年も 1/14の工業会新年会に始まり、1/23、2/27、3/27の SABS例会で先生の相変わらずお元気な独演を聞かせて頂いていたのだが、4月の例会（24日）は、たまたま私は幕張メッセに居なければならない用事があり欠席せざるを得ず、先生にはその旨メールでお伝えした。次にお会いしたのは 5/13の工業会懇親会だった。そこで私は 4月の例会に出られなかったお詫びを申し上げたのだが、先生はニコニコと「次の例会（5/22）には話題提供して下さい」とおっしゃっただけだった。「話題」の要旨をお送りしなければと思いつつモタモタしているうち、SABSジャーナル No.073（発行日が 2015年 5月 17日（日）となっている）が私のところに届いてしまった。5/22の例会予告だったのだが、そこには、私の欠席した前回の例会（4/24）に奥山先生も欠席されていたことが記されてあり、びっくり。さらに数日後には荒尾さんからメールがあり、先生が 5/19首都大学訪問中に倒れられ緊急入院されたとのこと。急遽 5/22は緊急理事会となり、そこでは先生の一日も早いご回復を祈りながら今後のことを話し合

うこととなってしまった。

その後の経緯は6/19発行のSABSジャーナル No.074に記した通りである。思えば、5/13の工業会懇親会が私の先生にお会いした最後だった。霞が関ビル36階であったパーティーのあと、私は１階のバーで千田さんといつも二人でやるささやかな２次会をやっていた。その時ガラス越しに見えたお帰りになる先生の後ろ姿を見たと言いたいところだが、実は千田さんに言われて振り返って見たとき既に先生のお姿はなかった。それからわずか４，５日後に倒れられたことになる。荒尾さんのお話では、私も欠席した4/24の例会のとき先生は丹毒で入院されていて、今考えるとご退院後まもなくあの日霞が関ビルに来られたことになる。お元気そうだなと勝手に考えていたのだがご病状は進んでいたのかもと考えると余計悔やまれる。

私と先生は、師弟関係や同僚ではなく、また研究ライバルでもなく、利害関係もないという関係であった。私にとって先生は生化学という非常に広い分野の大先達であった。生化学屋には博識を誇る人が多いのだが先生は理学部出身なのに大学院は医学部の研究室に居られたこともあり、特に実学的な博識は図抜けて居られた。お陰で非常に多くのことを先生に教えて頂いた。生意気にも反論を試みたことも多々あったがいつも的確にお答えいただき私の知識が訂正されたり広がったり大変な勉強ができたのだった。そして、もはや先生の謦咳に接することは出来ないのは誠に残念である。

標準化と雑誌「医学と生物学」の復刊という先生の残されたお仕事を微力ながら皆様とともにしっかりと続けていくことをお誓いして深くご冥福をお祈り申し上げます。

２０１５年１０月

檜山哲夫